

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380249

研究課題名(和文) アダム・スミスの思想を基礎とした総合知の構築

研究課題名(英文) Establishment of integrated knowledge on the basis of Adam Smith's thought

研究代表者

堂目 卓生 (Dome, Takuo)

大阪大学・経済学研究科・教授

研究者番号：70202207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：アダム・スミスの思想を、市場・社会・政府・経済成長に関する基礎的な思想として捉えた上で、スミス以降のさまざまな思想を検討した。その結果、スミスの思想は、アンリ・ベルクソンが言う「閉じた社会」(強い人、優れた人が頂点に立って、弱い人、劣った人を支配する社会)を前提にしているものの、「開かれた社会」(個人間のあらゆる差異を乗り越え、すべての人間を同等に扱う社会)を目指すものであることが分かった。そして、「閉じた社会」から「開かれた社会」への移行を目指す思想としてJ・S・ミルとアマルティア・センの思想が位置づけられることが分かった。

研究成果の概要(英文)：I examined various thoughts since Adam Smith, considering his thought as basis for market, society, government, and economic growth. Consequently, it became clear that Smith aimed at what Henri Bergson called "open society" (society handling all human beings equally over every difference between individuals) although he assumed "closed society" (society which strong and superior persons stand in the top, and rule over weak and inferior persons). Moreover, thoughts of J. S. Mill and Amartya Sen can be interpreted as father promotions from "closed society" to "open society".

研究分野：経済思想・経済学史

キーワード：アダム・スミス J・S・ミル アマルティア・セン アンリ・ベルクソン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2008年に『アダム・スミス「道徳感情論」と「国富論」の世界』(中央公論新社)を出版し、『道徳感情論』と『国富論』の関係について論じた。『道徳感情論』と『国富論』の関係について、従来から「アダム・スミス問題」(両著の間でスミスが想定する人間像は同一なのか否かという問題)と関連させて論じられてきたが、両著の関係についての体系的な説明は未だになされていない状態にあった。『アダム・スミス』では、『道徳感情論』と『国富論』において、利己心と同感の両方をもつ人間観が貫かれていることを前提として、両著の関係を体系的に捉える試みを行った。その後、「日本の復興と未来 - アダム・スミスの総合知に学ぶ」(『中央公論』、8月号、2011年)において、スミスの議論を、「同感によって支えられる社会」、「自由で公正な市場」、「経済成長」、「公平で効率的な政府」からなる図式を用いて体系化した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、スミスの思想にもとづいた図式に対し、スミス以降のさまざまな思想家たとえば、ナイト、トクヴィル、ロールズ、セン、ケインズ、ラスキン、J. S. ミル、カントなどの議論を加えることによって、目指すべき社会を論じる基礎となる「総合知」の構築を試みることであった。

## 3. 研究の方法

これまで研究を進めてきたアダム・スミスの思想を、『道徳感情論』と『国富論』のみなら

ず、『法学講義』や『修辞学・文学講義』、『哲学論集』などを含めて再検討し、市場・社会・政府・経済成長に関する図は気の妥当性を検証した。その上で、市場競争の倫理性に関するナイトの議論、トクヴィルのデモクラシー論、分配問題に関するロールズやセンの議論、総需要管理の意義を唱えたケインズの意図、経済成長の質を問題にしたラスキンの主流経済学批判とJ. S. ミルの応答、貿易が国際平和に与える影響に関するヒューム、カント、センの議論等を順次考察していった。

## 4. 研究成果

上記の方法に則して研究を進めた結果、スミスの思想は、ベルクソンが言う「閉じた社会」(強い人、優れた人が頂点に立って、弱い人、劣った人を支配する社会)を前提にしているものの、「開かれた社会」(個人間のあらゆる差異を乗り越え、すべての人間を同等に扱う社会)を目指すものであることが分かった。そして、「閉じた社会」から「開かれた社会」への移行を目指す思想として、ミルとセンが位置づけられることが分かった。それぞれの思想家についての具体的な成果は以下の通りである。

### (1) スミスの思想

『道徳感情論』において、スミスは人間には利己心のほかに共感の能力が与えられていると論じた。共感とは、他人の感情を自分の心の中に写し取り、それと同じ感情を引き起こそうとする心の働きである。この共感を使って、個人は胸中に「公平な観察者」を形成する。胸中の公平な観察者は、その社会において、何の利害関心ももたず、中立的な立場でものを見る人びとの見方を内部化したもの

である。個人が胸中の公平な観察者を使って善悪を判断することによって、社会秩序が形成される。このことは、個人の道德感が文化や伝宗教、伝統や慣習などに影響を受けることを意味する。このようにして成り立つ社会は、ベルクソンから見れば、「閉じた道德」や「静的宗教」によって成り立つ「閉じた社会」だと言える。

スミスが構想した社会は、こうした統合原理を土台として、社会の中で能力と機会に恵まれた人びとが富や地位を目指して競争する社会である。ただし、競争といってもルール無用の競争ではなく、競争者一人一人が胸中の公平な観察者の声にしたがって正義と道德を守った上でなされるフェアな競争である。競争がフェアであるときはじめて「見えざる手」が機能し、社会の繁栄が実現し、その恩恵が仕事や雇用になって競争に参加できなかった人びとに届くのである（いわゆるトリクルダウ）。スミスは、独占などの規制は有害であり、自由な競争が望ましいと述べたが、階級社会、つまり生まれや財産によって、競争から排除されている人びとを競争に参加させるための具体的な政策（たとえば普通教育や普通選挙）を積極的に提案しなかった。

このように、スミスは基本的に「閉じた社会」を前提に議論したが、「開かれた社会」の形成に向けた示唆も与えている。スミスによれば、他人との共感とは、共感する相手に対して自然な愛着を生む。愛着とは、その人の幸福や利益を願い、場合によっては、そのために自分の幸福や利益を犠牲にしてもよいと思う気持ちである。愛着の強さは、相手のことをどれくらいよく知っているか、共通点を見いだせるか、そして実際にどれくらい頻繁に共感するかに依存する。通常の場合、共感の

頻度は、自分を中心として、家族、友人・同僚・隣人、同胞、外国人の順に低くなっていくので、個人に対する愛着も同じ順序で薄れていき、それに応じて、共同体に対する愛着も、家庭、組織・地域、国、世界の順に薄れていく。スミスは、当時の現実的な人間交際の範囲から考えて、個人が持つことができる共同体への愛着は国までだと考えた。個人は、愛着を持つことができる人や共同体に対しては、公平な観察者の判断に従って自分の行為を制御することができるが、愛着を持つことができない人や共同体、特に利害が対立する人や国に対しては、制御できないことがあり、場合によっては国民的偏見、つまり差別意識を持つことさえある。

スミスは国と国が平和共存するためには、相互交流を通じて、共感の範囲を拡げ、両国に共通の公平な観察者、つまり、どのような文化や慣習からも独立した人類共通の「開かれた公平な観察者」を見いださなくてはならないと考えた。そして国家が介入しない、つまり国益を優先しない自由な貿易こそ国民間の相互交流を促す有力な手段だと考えた。国民と国民をつなぐ富、それがまさしく Wealth of Nations というタイトルに込められた意味であった。

## （２）Ｊ．Ｓ．ミルの思想

ジョン・スチュアート・ミルは、スミスの経済学を引き継いだ。ミルの時代は、世界で初めての万国博覧会が開かれるなど産業革命の成果が本格的に現れる一方、ロンドンのスラム化が深刻になるなど、産業化の影も見え始めた頃であった。イギリス国民は、産業化の波に乗れた人と乗れなかった人に二分され、格差は広がっていった。このような中で、ミ

ルは、スミスが唱えたフェアな競争を支持しながらも、競争を真の意味でフェアにするために、競争に参加する機会がより多くの人に開かれるべきだと考え、機会の均等化を訴えたのであった。

ミルは、個人は質の高い快楽を追求すべきだと考えた。「質の高い快楽」とは、様々な快楽を経験した後に個人が積極的に選ぶ快楽のことである。たとえば、飲酒の快楽しか知らない労働者が飲酒を選びつづけるのは、いくら本人がそれで満足しているとしても、質の高い快楽の追求とは言えない。教育を受ける、芸術を鑑賞する、政治に参加するなど、他の快楽を経験した上で自分にとって本当に快いことは何かを考えなくてはならない。そして、社会は、個人が性格に応じて自由に快楽を追求できるよう、多様性を容認し、あらゆる人に諸活動の機会を開くべきである。生まれや性別によって、追求してよい快楽を限定するのは社会全体の快楽を最大化することにならず、社会の繁栄を妨げるもだと言える。

このような自由の原理に立って、ミルは諸活動の機会均等化を訴えた。たとえば、教育を受ける機会は労働者階級を含めたすべての人に開かれるべきであり、政治に参加する機会も女性を含めてより多くの人に拡大されるべきだと主張した。また、相続税を用いて同世代における経済的初期条件の格差を縮小しよう、すなわち競争のスタートラインをそろえようとした。さらに、社会主義的実験として、労働者が資本を所有する生産協同組合などを奨励した。

ミルが構想した社会は、機会の均等化によって、より多くの人を競争プロセスに取り込み、社会の繁栄や経済成長につなげようとするものだと言える。

### (3) アマルティア・センの思想

1998年にノーベル経済学賞を受賞したインド人の経済学者アマルティア・センは、スミスやミルの思想を受け継ぎつつ、「人間開発」(human development)という視点に立って、開かれた社会を目指している。

センによれば、人生はケーパビリティ、つまり選択の幅を広げるために与えられた時間であり、個人は、自分のケーパビリティが最大になるようにエージェントとして行動すべきである。エージェントとはパーシエント(患者)と違い、誰かが助けてくれるのをじっと待つ存在ではなく、自分から積極的に行動する主体のことである。社会は、個人 特に自然的・社会的要因によってケーパビリティの拡大を阻まれている個人 がエージェントとして行動できるよう、経済的便宜・政治的自由・社会的機会・透明性の保障・保護の保障という5つの「手段としての自由」を整備すべきである。経済的便宜は物質的な豊かさを、政治的自由は平等な政治参加を、社会的機会は教育や医療などのサービスを受けられる機会を、透明性の保障は情報アクセスの自由を、そして保護の保障は飢饉や災害などの危機に対する準備を意味する。経済的便宜、つまり物質的な豊かさが人間開発のための手段のひとつでしかないところに注意すべきである。

センにとって「開発」(development)とは、5つの手段としての自由がバランスよく増大することを意味した。そうした中で個人のケーパビリティが拡大される。しかしながら、重要なのは、各個人がケーパビリティの拡大を「待つ」のではなく、エージェントとして自ら行動して獲得しなくてはならないという

点である。すでにケーパビリティが開発されている人だけでなく、何らかの要因によって開発されていない人も「行動」しなくてはならない。個々人が分断されていればそのような行動をとることはできないので、諸個人間の「連帯」が必要になる。5つの手段としての自由を獲得すべく、諸個人が連帯しながら行動することによって、気がつけばひとりひとりのケーパビリティが以前よりも大きくなっている、これが、センの描く「人間開発」の図式である。

センの考え方は国連開発計画（UNDP）において用いられた。国連開発計画は、1990年以来、各国が人間開発にどれだけ真剣に取り組んでいるか、つまり、個人がケーパビリティを拡大するための環境をどれだけ整備しているかを示す指数「人間開発指数」（Human Development Index）を作成し、そのランキングを毎年公表している。

センは、人間開発の視点から、民族や宗教を超えた開かれた社会の構築を目指す。センによれば、個人にとって、アイデンティティ、つまり自分を自分として認識するときの拠り所は、年齢、性別、民族、国籍、居住地、職業、宗教、政治信条、趣味など、複数存在するはずである。自由な社会では、個人は複数の拠り所の中から、時と場所によって優先すべきものを選択し、様々な人間関係を形成することができる。反対に、国や民族、宗教など、単一の基準を絶対的なアイデンティティとして個人の心に植えつける社会は、集団の結束力と活動力を高めるように見えるかもしれないが、個人の考え方や行動は一面的で硬直的なものになり、ケーパビリティの拡大を妨げることになる。さらに、異なった社会の人々とのつながりが断ち切れ、対立や暴力

が生まれる危険性が高まる。センは、世界の人々が国や民族、宗教など、特定のアイデンティティにとらわれず、自分の中に複数のアイデンティティがあることを認識し、多様な人々と交際を広げ、ケーパビリティを拡張すべきだと考える。特に、情報化が進む現代において、国や民族、宗教の枠を越えて、多様な人びとと交流することは、これまでよりもはるかに容易になったと言える。

センが構想する社会は、ミルの機会均等化をより積極的に推し進めた社会と見ることができ。つまり、社会全体が物質的に豊かになる可能性を犠牲にしたとしても、不利な状態にある人のケーパビリティの拡張を優先し、拡張を妨げている諸要因を社会全体でとり除くべきだと考える。この意味で、センは結果の平等に踏み込んでいると言える。

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計1件)

堂目卓生、アダム・スミスの遺産 - グローバル化の時代を見据えて、社会思想史研究、査読無、40巻、2016、10-26

### [学会発表](計8件)

堂目卓生、目指すべき社会を考える、國學院大學経済学部学術講演会、2017、國學院大学

堂目卓生、目指すべき社会を考える、日本政策投資銀行設備投資研究所アカデミックセミナー、2017、日本政策投資銀行設備投資研究所

堂目卓生、目指すべき社会を考える、立命館大学西園寺塾、2017、立命館大学

堂目卓生、経済学と人間学 - アダム・スミ

スの総合知、立命館大学稲盛経営哲学研究センター研究会、2016、立命館大学  
堂目卓生、グローバル化時代のスミス、アダム・スミスの会、2015、芝蘭会館  
堂目卓生、アダム・スミスの遺産 - 市民社会の形成に向けて、社会思想史学会、2015、関西大学  
堂目卓生、イギリス経済学の歴史から見る経済学と人間学の関係、一橋大学経済研究所規範経済学研究センター設立シンポジウム、2015、一橋大学  
堂目卓生、アダム・スミスに学ぶ、知的基盤研究会、2014、司法研修所

[ 図書 ] ( 計 2 件 )

Takuo Dome, Edward Elgar, The Elgar Companion to David Ricardo, 2015, 538-546

堂目卓生 他、阪急コミュニケーションズ、「災後」の文明、2014、152-165

6 . 研究組織

研究代表者

堂目 卓生 ( DOME, Takuo )

大阪大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：7 0 2 0 2 2 0 7